九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

研究余滴 宇万伎の古道論

飯倉，洋一
九州大学助手

https://doi.org/10.15017/10466

出版情報：文獻探究. 16, pp.73-75, 1985-09-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

研究余滴

宇万伎の古道論

飯倉洋一

明和四年十一月十八日付宣長宛書簡で、真淵は宇万伎を推賞して次のごとく述べた。逝去のおよそ二年前のことである。

ここにも藤原宇万伎（加藤大助といふ大番与力也）わが流を伝へてことに古事記神代の事を好めりいまだ其説は口をひらかねど終にはいひ出べき人也向来御申合候而野子命後は御此事をはたし給へかしと願事也　（『縣居書簡続篇』所収）

死期間近しとの自覚あった真淵にとって、宇万伎は宣長と並んで、自ら果たせなかった『古事記』研究大成の夢を託すことのできる有力な学徒であった。だが、宣長の華々しい業績とは対照的に、今日見ることのできる宇万伎の古代研究の成果は甚だ少ない。

お茶の水図書館成簣堂文庫に伝わる宇万伎書入れの『日本書紀』（寛文九年版大本三十巻十五冊）は、彼の緻密な研究態度を看取しうる好資料である。第十五冊末に識語二条。その一は、「日本書紀自神代至持統天皇紀三十巻得荷田東満荷田在満二子考訂之書而校合焉宝暦十年庚辰秋八月八日藤原宇万伎」。その二は、「安永四年乙未浪華にして契沖法師が手つからかうかへたゝせる書を得てなほかうかへあはせてしるせしせふつき十二月をはりぬ」と。すなわち、宝暦十年に荷田二氏の、安永四年には契沖の考訂本を得て、自説をも書入れた、いわば私家版諸注集成であった。本文中には、『日本書紀口訣』『日本書紀纂疏』をはじめとして、松下見林、天野信景、鴨祐之、上田秋成等の諸説が細かく書入れられている。少なくとも四十一歳から五十五歳までの十五年間、この本は宇万伎の座右の書であったと思われる。

真淵の期待した『古事記』研究については『古事記解』三冊（『寛政以来諸家著述目録』）の書名が伝わっているが、その内実は明らかではない。ただ、安永六年六月十日の死去の直前、すなわち同年四月二十九日、病臥の宇万伎は宣長に『古事記伝』草稿の借覧を申入れている。その書簡（「心の花」十七巻四号、ただし引用は『本居宣長稿本全集』二による）に、

然處承及候得ば、足下古事記伝御著述被成候由、古事記之義は、僕事も多年実に心を入候て、漸此一両年已来少々見當心を得候様に覚候事も有之候。やがて書集も仕度候處、去々年より之病氣にて一向一紙も認不申、心に少しづつたくはへ置候耳に御坐候。此まゝにて死去も仕候はゞ地下之遺恨此事耳と奉存候。

と、『古事記』研究への執念を綴っている。書簡にいう「此一両年已来」とは、先引『日本書紀』識語にいう「安永四年七月」以後と考えてよいだろう。古代研究の基礎固めとしての『日本書紀』研究に一応の区切りをつけ、いよいよ『古事記』の本格的研究に着手した矢先の病気だった。宇万伎の無念さは推して知るべしである。

宇万伎が古代研究に並々ならぬ熱意を注いだことは、以上で十分窺い知ることができる。とすれば、「わが流を伝へ」ると真淵自らが保証する宇万伎の古道論が、真淵のそれをどう継承したかは、甚だ興味深い問題である。とはいえ、資料は乏しい。ここでは、本誌前号拙稿で取りあげた天理図書館蔵『静舎随筆』の第二問答における宇万伎説の分析を通し、その一斑を探ってみる。なお、『静舎随筆』の概略については前号拙稿を参照されたい。

末尾に「右明和元年九月しるす」と年次のあるこの問答は、同姓聚婚についての「ある人」の問いに答えて、宇万伎が古道論を開陳したものである。尚古主義批判の立場からなされる「ある人」の問いとは、「古代尊しというけれども、古代人が、同姓はもとより妹

さえをも妻とするのは人倫に反している。爾後、中国の聖人の教え果りて、人々ははじらいを知り、今ではそういうことはなくなった。それでも古代尊重というのか」というもの。対する宇方伎の回答は次のごとし。

まことに皇朝のいにしへはしかり。しかハあれとも、はらからたはくるハ大に罪あること紀にもしるしつ。ことハらなるハ后にも立給ひしなれハ、いまさりしなりけり。これそあめつちおのつからの道なりけり。

同姓聚婚といっても同母兄妹の結婚は禁忌である。しかし腹違いなら構わない。それは天地自然の道に適っているからだ、というこの説は、明らかに真淵の考え方に基礎をおくものだった。『国意考』に言う。

同姓をめとらずといふを、よしとのみ思ひて、此国は兄弟相通ずたり、獣に同じといへり。天の心にいつか鳥獣にことなりといへるや。生とし生るものは、皆同じこと也。尊く制を立るは人なれば、其制も国により、地によりこと成るべきことは、草木鳥獣もこと成が如し。然れば其国の宜に随て、出来る制は、天地の父母の教也。此国のいにしへのはらからを、兄弟とし、異母をば兄弟とせず、よりて、古へは人情の直ければ、はらから通ぜしことはなくて、異母兄弟の通ぜしは常に多し。たまくはらからの通ぜしをおもきつみとせし也。

人間の自然の人情に従って古代の制は「天地」の教えであり、同姓結婚も異母兄妹ならば非難するにあたらない、とする真淵の思想はそのまま宇方伎に継承されている。

しかし、「あめつちのおのづから」に従うという認識の論理化について言えば、真淵と宇方伎との間には若干の相違がある。右の引用部にも見えるとおり、また「天地の父母の目よりは、人も獣も鳥も虫も同じこと成べし」（『国意考』）と述べるごとく、真淵は人間を鳥獣と同じく森羅万象の自然の中に還元する。そしてそれが体現されていた古代を尊び、人智の教えである儒仏の道が入った後代に否定的である。

凡世の中は、あら山、荒野の有か、自ら道のひろごりて、おのづから、国につきたる道のさかえは、皇いよくさかえまさんものを、かへすくへ、儒の道こそ、其国をみだすのみ、こゝをさへかくなし侍りぬ。然るをよく、物の心をもしらず、おもてにつき、たゞかの道をのみ貴み、天が下治るわざとおもふは、まだしきことなり。（『国意考』）

真淵のいう「おのづから」の道、すなわち「神代の道」は「儒の道」に対置されることによって、一種の規範性を持つことになった。彼の古道論が宣長・篤胤の神道思想の基礎となったとされるのも、「道」の規範化を可能性として内在していた点にかかっている。

しかし、宇方伎の「おのづから」の認識は規範よりも現実を志向する。後代には同姓聚婚が忌避されるようになったという歴史的現実をふまえて、問者が「しからばいにしへのならひをよしとし、今のいむなるを、おのづからにたがひてあしとせんや」と質すのに対して、宇方伎は、次のように述べる。

あらず、いにしへは古しへにしてよし。今はいまにしてあし（原文のママ、傍に「よし欤」の朱注あり）。いかにとなれば、あめのます人の心はやかて天つちの御こゝろ也。をしへねと、世こそりてことはらなりとていもせとなるものやハある。これおのつからのならはしなす、今の世にして、千たりにひとりそむくものあらハ、必天津罪国つみをえて、身もほろひぬへし。

石の冒頭部分を秋成が『呵刈葭』下篇に引いたことは周知の事実だが（中村幸彦「宇方伎と秋成」「山辺道」第四号、のち『著述集』

第十二巻所収）、「阿刈葭」日の神論争で顕在化した宣長と秋成の思想的対立は、遡れば、真淵と宇万伎の認識の相違に至ると言っても失当ではないだろう。

それはともかく、右のごとき宇万伎の現実主義的歴史認識を可能にしたのは何であったか。それは彼が「おのづからの道」をきわめて具体的な要素、すなわち「ならはし」と「人々のこのみ」に還元したところに求められよう。問者の「さらばことはりをとはず、いかばかりあしざまなる事有ともあらためず、そがままにおこなふを道とすべくや」という質問に、宇万伎は「しかなり。よしといはむもあしといはむも其もとはふたつはあらで、たゞならはしと人々のこのみによるのみ」（傍点飯倉、以下も同様）と明言する。そう規定することによって、後代に入った教えといえども、それが人々の「このみ」に合致し、「ならはし」として定着すれば、立派に「道」であるという論理が生じるだろう。火葬についての彼の言及にそれを見てとることができる。

人死すれは焼てはふるはひとの国のならはしなり。教のためことわりをまうけて、そをすらよしといへハ、聞うる人ことわりをめてゝこのむ心から、こゝにもたへて、やかてならハしなしぬれハ、親をたに焼はふりてよしとおもへり。

その宇万伎とても、儒道を「をしへのみにつくれる道」と規定し次のごとく述べる。

なへてをしへのみにつくれる道ハ、ことわりハさるものから、人の才より出て、あめつちの道にハたかふもあれハ、つひにハおこなはれすして、其みち必くつる、くつるにいたりてハ、かへりてさまたけとなれる事いとおほかなる、たゝ天つちのなりのまに〳〵おこなふ道ハ、くつる事なく、そむくものなし。

しかし、これは「をしへのみにつくれる道」が全て「あめつちの道」に反するという論ではない。反する場合もあり、その場合は結局崩壊するだろうというのである。宇万伎はより具体的に、そのような教えは「ならはし」を改め、今より後の人に守らせんと、かたく法をたて」たものだと説明する。

その立脚点を「ならはし」あるいは「人のこのみ」に置くことによって、宇万伎の「おのづからの道」は、古代の絶対化をまぬかれたのである。

本問答の主題である古代における同姓聚婚についても「うからいもせとなるもならはしのまゝなり」と、「ならはし」と捉えることによって肯定していくのである。しかし、その際注意すべきは、同姓聚婚はまるで鳥獣と同じだという批判に対し、真淵は、人間も鳥獣と変わらないという思想を前面に押し出してくるのに比べ、宇万伎は「はらからはまたくおなしたくひなれハ、鳥獣の如みあひせさりしも、人にそなはりしおのつからの道也」と、むしろ人間を鳥獣と区別し、血縁同士の結婚をしないという倫理的側面を「おのつからの道」として強調する。その上で「おのつからのならはしのまゝにしてことわりをいはさるそ、いにしへの道にしてたふとかりけり」と、古代を讃仰するのである。基本的には真淵の古道論を継承した宇万伎が、儒教批判に向かわなかったのは、古しへの道に備わる倫理的側面を見逃さなかったからであった。

――九州大学助手――